

喬旦加布

平成 26 年度 文化科学研究科学生派遣事業 研究成果レポート

1. 事業実施の目的

第 62 回日本チベット学会研究大会での研究発表と講演

2. 実施場所：北海道苫小牧市苫の市民会館と苫小牧駒澤大学、札幌市中央区のヒマラヤ
圏サパナ

3. 実施期日 平成 26 年 10 月 24 日 ～ 平成 26 年 10 月 26 日 （ 3 日間）

4. 成果報告

●事業の概要

この度、私は学生派遣事業の支援を受け、2014 年 10 月 24 日～25 日にそれぞれ北海道苫小牧市民会館と苫小牧駒澤大学において開催された「第 2 回チベット学情報交換会」と「第 62 回日本チベット学会研究大会」、それに 26 日の札幌市での講演会などで研究発表を行った。

日本チベット学会は 1954 年に設立され、「世界の中でも最も古いチベット学会である」といわれている。印度学と仏教学をはじめとする歴史学、言語学などの分野からチベットに関する学術研究をおこなうことによって、年 1 回の研究大会を開催し、学会誌『日本西藏学会会報』の発行を行なっている。今の会員数は 300 人を超えている。私は 2012 年から会員になり、昨年（2013 年）の第 61 回目の研究大会でも発表を行った。今回の大会では約 50 人のチベット学研究者が一同に苫小牧市集まり、2 日間の両大会で 15 名のチベット学研究者が研究発表を行った。その後、長野会長を中心に学会の運営状況と今後の発展などについて報告を行った。

「チベット学情報交換会」は、チベット研究を発展させるために、若手研究者が中心に分野の垣根を越えて学術情報を交換する場として、昨年（2013 年）の学会の際、日本チベット学会の下に設立されたのである。



写真 1 第二回チベット学情報交換会 （岩尾一史 撮影）

今回の第二回目の情報交換会では、以下の先生らが研究発表を行った。

- ① 大川謙作 「チベット社会論の探求」 東京大学リーディング大学院 多文化共生・統合人間学プログラム 特任助教
- ② 小松原ゆり 「チベット・清朝関係の建前と現実」 明治大学文学部・農学部 兼任講師
- ③ 武内紹人 「文献研究から最近すこし見えて来た、チベット文明の特徴の一端」 神戸市

④ 福田洋一 「カダム派論理学書の（秘）KWIC 検索サイト」大谷大学文学部 教授

二日目の第 62 回日本チベット学会研究大会では以下の研究発表を行った。

1. チベット村社会における鳥葬の相違点—有名な鳥葬場の事例から—ガザンジェ（金沢大学人間社会環境研究科）
2. チベット・アムド地域におけるシャーマン「ハワ(lha ba)」—レプコン・ウォッコル村の事例から—チホルテンジャブ（総合研究大学院大学）
3. 「六座上師瑜伽」にみる発菩提心—ラマの密意—… 岡崎清子（チベット仏教ゲルク派）
4. タントン・ギャルポ伝説をめぐって—パロ・ティンブーの現状 2014— 坪野和子（埼玉県立岩槻高校／チベット文化研究所）
5. 1 世紀以上に亘ってなされた約 10 回の唐・吐蕃会盟（706～821 年）の様相—唐から見た吐蕃との外交交渉— …… 菅沼 愛語（京都女子大学）
6. タルマリンチェンの svabhāvapratibandha 理解— 'brel ba の定義をめぐって— …… 崔 境眞（東京大学大学院）
7. ツオンカパ『縁起讚』の文学世界 …… 根本 裕史（広島大学）
8. ツオンカパの自立論証批判 …… 福田 洋一（大谷大学）

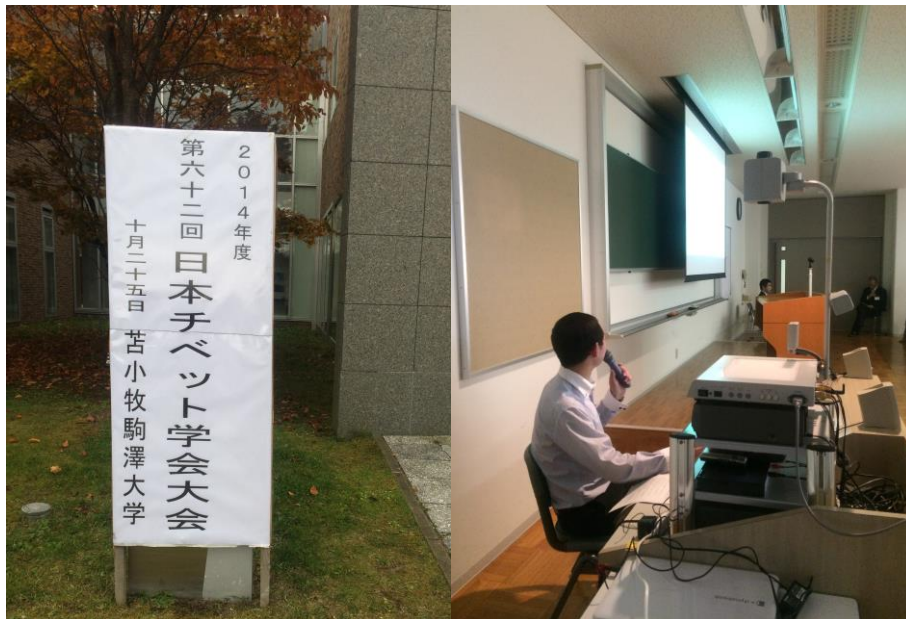


写真 2. 学会の研究大会

私は今回の研究発表では、夏のフィールド調査の成果の一部として「チベットアムド地域におけるシャーマ(ハワ lha ba)」というテーマで発表を行い、主にルロ祭の主役であるハワの由来と村社会での役割、変化などについて研究報告を行った。

その後、26 日のヒマラヤ圏サパナの依頼で一般の札幌市市民に対しての講演会ではこれまで行って来た「チベットアムド地域における奇祭-ルロ」というテーマでルロ祭を紹介した。



写真3. 札幌市市民の講演会

両発表を通して日本国内のチベット仏教学と言語学、歴史学、人類学など一線の諸チベット学研究者、一般の市民などと深く交流ができた。だが以上のプログラムからわかるように文化人類学専攻の会員は少数であった。学会で諸研究者からのコメントや指摘などの不足点などについて反省し、これらの経験を今後の研究に生かしたい。

●学会発表について

発表要旨

本発表では、チベットアムド地域におけるルロ祭で登場するハワすなわちシャーマンに焦点をあてる。その由来と、ハワの村社会での役割、反右派闘争から文化大革命期のハワのおかれた状況、文革後の新たなハワの誕生の手続き、また市場経済化と観光化が進展している今日までのハワの変化などについて報告した。

現在、アムドのハワは村人の物質・精神両方面の生活にとって特別な存在であり、特に祭りの時、主導的役割を果たす。村人はトランス状態になったシャーマンをハワ lha ba（「神の人」の意）と呼び、トランス状態になっていない時はトンリ thun res（役員）と呼ぶ。

チベットにおけるシャーマンは、仏教以前のシャマニズム的信仰やポン教の儀礼でも欠かすことができず、その歴史は非常に長い。シャーマンの職能者は元来、シャンジョン・ポン教の時代から存在した（mKhar rtse rgyal 2009）。8世紀にインドから密教の行者パドマサンバヴァがチベットに来て土着神霊の鎮撫を行った際、シャーマンを通じて神の意向をうかがい、チベット仏教の枠内におけるシャーマンの制度を確立したと言われている。その後、吐蕃の統一政権が崩壊してから数百年の間に徐々に制度化されたシャーマンが民間に広がり、農牧民の生産や病気治療、占術、日常生活など隅々までその影響力が及ぶ形で、村社会に根付いた。

チベットアムド地域にみられるハワは、「破旧立新」のスローガンで文革期に批判され、その全ての活動が禁止されたが、80年代以降、次第に復活してきた。

本発表ではレプコン・ウォッコル村を中心に、周辺地域のシャーマンとの比較を通じて、近年のハワの状況を考察し、その特徴を明らかにし、チベットのシャーマン文化の中でアムドのハワはどのように位置づけられるか考える。

●本事業の実施によって得られた成果

今回のチベット学会を通して日本におけるチベット仏教学や言語学、歴史学などチベット学の最先端の研究者らの発表を聴き、非常に良い勉強になった。

私のチベットのシャーマンについての今回の発表は、今後の博士論文の執筆にあたって、重要な一部であり、今回の発表を通して仏教学者や歴史学者などの分野を超えて、一線の諸チベット学研究者から良いアドバイスとコメントを得た、これらの知識を今後の研究に生かしたい。

●本事業について

フィールド調査を重視する文化人類学を専攻する院生にとって非常に有益な事業である。